博士論文審査及び学力の確認の結果

審査委員（主査）　黒　澤　直　俊

学位申請者 馬場良二

論文名　João Rodriguez『Arte Grande』の成立と分析

【審査結果】

本論文はジュアン・ロドリゲス João Rodriguez の *Arte Grande*『日本大文典』(1604) について，ギリシャ・ローマ以来の伝統に基づく当時の西欧の文法観を背景にその成立を探るとともに，同時代に広く用いられていたラテン語学習書のマノエル・アルバレス Manoel Alvarez による *De Institutione Grammatica*『文法の教え』(天草版) と比較し分析することで，『日本大文典』での「副詞」の概念や頻出する「エレガント」という語で意味されていたものを考察したものである．さらに，従来，日本での解釈に疑問のあった「sonsonete」という用語の意味や，「ラング，ランガージュ，語」に対応するポルトガル語の使用例などを詳細に検討している．『日本大文典』には Bodleian 本と Crawford 本の２つの資料が現存するが，当時の刊行では印刷を行いながら同時に校正するのがかなり通例であったこともあり，同じ版でも異同のある可能性が存在する．従って，現存するすべての刊本を確認するのが研究の出発点とされているが，その点でも馬場氏は Bodleian 本と Crawford 本の校合を丹念に行なっている．馬場氏の研究の独自性は『日本大文典』を単なる日本語史の資料としてとらえるのではなく、上級日本語学習者であり，かつすぐれた日本語教育者であったロドリゲスによる一貫した構成体として『日本大文典』に向き合ったことである。従来にはあまり関心が払われなかった点やこれまでの日本での研究でポルトガル語力の不足からか誤って解釈されていた内容などが修正されている．さらに用語や用例を詳細に比較，検討しているため基礎資料としての価値も高い．なお，本論文は 1999 年に『ジョアン・ロドリゲスの「エレガント」―イエズス会士の日本語教育における日本観―』として風間書房より出版された著書を改定したものである．博士論文としての提出に際しては，章の追加や削除を行っている他，章立てが大幅に変更されている．　Crawford 本との校合もこの段階で行われている．

審査委員会は，論文審査と最終試験（公開審査）の結果、学位申請者に対し博士（学術）の学位を授与することが適当であると全員一致で判断した。委員会の構成は以下の通りである：黒澤直俊（ポルトガル語学），村尾誠一（中世日本文学），川村大（日本語学），岩崎務（ラテン語学），中道知子（日本語教育）．

【論文の概要】

本論文は序文や目次、参考文献リストなどを除く 207 頁からなり，各章の構成は以下の通りである．第２章から第９章には関連事項の詳細な表がつけられている．

第１章　文典成立の歴史的及び言語的背景

第２章　ラテン語学の与えた影響

第３章　ADVERBIO「副詞」について

第４章　elegância, elegante, elegantemente

第５章　sonsonete

第６章　língua, linguagem, palavra

第７章　Bodleian 本と Crawford 本

第８章　*DE INSTITVTIONE GRAMMATICA* と *ARTE GRANDE* とにおける日本語引用例の対照

第９章　Bodleian 本と訳本とのローマ字つづりの異同

以下，章立てにそって内容を敷衍する．なお，本論文ではポルトガル語の単語や用例を引用するに際し，綴りに関しては，原本における資料上の差異などが特に問題とされない限り，1973 年にリスボン大学言語学研究所の文献研究グループによって提案された「ポルトガル語中世テキスト転写規範」（Normas de transcrição para textos medievais portugueses, *BF XXII*, 1973 pp.417-425, Lisboa）によっている．これは，イタリアを中心とする現代文献学の研究を踏まえ，中世のポルトガル語テキストを校訂するにあたり写本や印刷資料からの転写ルールを定めたもので，テキストの解釈や研究において，言語体系上，有意味で必要十分なかたちで原本資料の綴り字の異同や省略記号の展開の仕方を統一したものである．従来，日本でポルトガル語資料を扱った研究はポルトガル語やポルトガル語史に関する基本的知識を持たない人々によるものが多かったため，言語学的に無意味な区別が必要以上に維持されたり，逆に，当時の言語事実を考える上で重要な資料上の差異が校訂本などに反映されないということがあった．その意味で，馬場氏の論文は，ポルトガル語資料を厳密かつ必要十分な形で扱った，本邦で初めてのものと言える．ただし，現在，ポルトガル語の中世語文献の校訂版や研究書などは，この 73 年のリスボンのグループによる「規範」よりはやや保守的な転写規則によるものが一般的になって来ている．写本のテキストの研究では写字生ごとに特徴や癖などを問題にすることがあり得るからである．なお，『日本大文典』は印刷本なので，この点で馬場氏の扱いにはなんの問題もない．

「第１章　文典成立の歴史的及び言語的背景」では，大航海時代とイエズス会の活動や当時の西欧の言語観などを跡づけながらポルトガルの寒村で生まれたジョアン・ロドリゲスが日本語をものにし，文典を書き上げるまでに至った背景が記述される．その後，「第２章　ラテン語学の与えた影響」で『日本大文典』と，同時代に広く用いられていたラテン語学習書の『文法の教え』（天草版）が詳細に比較対照される．このマヌエル・アルバレスの『文法の教え』には天草のコレジオで出版されたものがあり，ラテン語に日本語が加えられている。馬場氏は，先行研究を批判的に検討しながら，『日本大文典』と『文法の教え』を比較し，両者の章立てが対応している部分，すなわち『文法の教え』が『日本大文典』のモデルになっている部分を明らかにしつつ，同時にそのなかでの日本語の扱いを検討したり，さらに『日本大文典』にあって『文法の教え』にはない章や項目，具体的には，動詞の否定語根，書き言葉の動詞，待遇，助辞，格辞，後置詞，「こゑ」と「よみ」，関係詞，方言，などについて検討することで当時の言語観の枠組みのなかでロドリゲスが体系的に日本語を描き出そうとした，その試みを活写している．章末に両者の章立ての対照表がつけられている．

「第３章　ADVERBIO「副詞」について」は，副詞の記述に関して『文法の教え』と『日本大文典』を比較対照し，前者から後者への影響と後者の独自性をあきらかにしたものである．副詞は西欧の文法伝統のなかでどのように分類されてきたか，すなわちギリシャの文法家ディオニシウス・トラクスで26種類に分類されていた副詞が『文法の教え』では25分類に，『日本大文典』にあっては30分類となっていることが示される．この章では『文法の教え』と『日本大文典』に現れる副詞のすべての例が詳細に検討されロドリゲスの独自性とその工夫のさまが記述されている．章末には詳細な分類表がつけられ，『日本大文典』の構造を分析考察したこの博士論文の中核といえる章である．

「第４章　elegância, elegante, elegantemente」は日本語に訳せば「エレガント，エレガントな，エレガントに」とでもなろうが，この「エレガント」に関わる語は『日本大文典』とともにロドリゲスの著になる『日本小文典』と合わせると，136回用いられているという．そもそも「エレガント」はローマ以来西欧では特に言葉遣いの上品さや適切さに対して用いられて来た傾向があるが，馬場氏はこの136例の「エレガント」についてどのような文脈や意図で用いられているかを詳細に検討している．その検討を通じて日本語の教育者としてのロドリゲスの姿，言語観を描き出したのがこの章で，馬場氏のオリジナリティーであると言える．本文での検討の他に章末には136例に関しての事項，分類，説明，文の要約をまとめた表があり，資料的価値も高い．

「第５章　sonsonete」は『日本大文典』に１０例現れる用語であるsonsoneteに関する考察で，従来の日本の研究では鼻音性に関連して解釈されて来たが，馬場氏はポルトガ

ル語，そして語源であるスペイン語に立ちもどり,『日本大文典』における 10 例の文脈にそって再解釈した結果，1）もって回ったような，もったいぶった調子，2）母音連続，長母音に見られる地方なまり，3）ポルトガル語なまり，4）有声子音の前の母音の鼻音性，の 4 つの意味があるとした．従来の解釈の問題点を指摘するとともに新たな解釈を確立した好論考である．「第 6 章　língua, linguagem, palavra」は，この「言語，言葉，語」に対応するポルトガル語の単語についてロドリゲスの使用を確認したもので，一見して混乱した使用とも見られがちであった従来の見方に一石を投じ，ロドリゲスが一貫した原理のもとに語を使用していたことを示したものである．

「第 7 章　Bodleian 本と Crawford 本」は 2 資料を校合したもので，「第 8 章　*DE INSTITVTIONE GRAMMATICA* と *ARTE GRANDE* とにおける日本語引用例の対照」は両書に見られる日本語引用例の綴りを詳細に検討したもの，そして「第 9 章　Bodleian 本と訳本とのローマ字つづりの異同」は原書と土井忠生による『日本大文典』の訳本（1955）の間の異同を指摘したものである．土井の仕事は今から半世紀以上も前に行われたもので現在とはちがったさまざまな困難のなかで行われたに違いなく，その意味で，531 カ所にわたる用例の修正が行われていることは好ましいことである．

【論文の評価と判断】

馬場氏の論文で評価される点は以下のようにまとめることが出来る．

1）『日本大文典』とラテン語学習書の『文法の教え』を，特に日本語の対応語や表現が挿入されている 1594 年の天草版で比較することにより，『日本大文典』の構成が,ギリシャ文法以来の西欧の文法伝統に則って作られているということを詳細に明らかにしたこと．さらに，副詞の章を例に取り，ロドリゲスがどのように日本語をラテン語の体系に当てはめたかを詳細に分析した．

2）elegância, elegante, elegantemente という語がロドリゲスのテキストでどのように用いられているかを，ほぼ「完全に」に分析し，そのことを通じロドリゲスの言語観，あるいは日本語・日本語教育観がどのようなものだったかを明らかにした．

3）sonsonete という語のテクニカルな意味を初めて明らかにしたこと．

4）língua, linguagem, palavra という語がどのように使われているかをテキストのなかで分析し，ロドリゲスの言語観を明らかにした．

5）Bodleian 本と Crawford 本の校合を行ない，両者の異同を明らかにした

6）Bodleian 本と日本語訳本の間に見られる異同，一部は誤りを指摘修正したこと．

7）以上の分析を通じて『日本大文典』を日本語史資料としてではなく，日本語教育の観点からの資料としてとらえ直し位置づけたこと,及びこれらの考察をポルトガ

ル語学の伝統に踏まえて行っていること.

なお，委員からは次のような指摘があった.

1）原書の日本語のローマ字表記をよりよく解釈できるように，ポルトガル語学の立場から通時音声学的,あるいは比較音声学的な説明があってもよかったのではないか.

2）西欧の言語観という点では，例えばキケローの『弁論家について』などに見られるように文法学とは別に修辞学の伝統があるが,こちらのほうにも踏み込んでほしかった.

3）引用されている和歌などについての出典なども触れてもよかったのではないか.

最終試験の場ではポルトガル語やラテン語の細かい解釈や資料の読みなどについての指摘があったが，それらに馬場氏は十分に答えていた．いくつか，細かい点で修正すべき点もあるものの，その点については馬場氏も了解しており，総合的に判断して『日本大文典』の研究に対する馬場氏の貢献は明らかであり，以上から，審査委員会は論文審査と口述による学力の確認の結果，馬場良二氏に博士（学術）の学位を授与することがふさわしいとの結論に達した.